

サレムに連れて行き、お宮の外廊の目も眩むばかりに高き縁に立たせて、こう申してござる。

「そなたさまは神さまの我が子と慈しむお方でありなさる。それなら、ここから下へ身を投げて御覧なさりませ。何となれば、『尊き書き物にも』こう書いてござる。①『神さまは、そなたを守れと、使いたちに下知なされ』と。②『さらにこうござる、③『それで、使いたちは手を伸べて、そなたを支える。そなたの足が石に打ち当たらないようにするために』と。」

④しかし、イエシューさまはこれに答えて、言ひなさつた。

「こうも書いてある、⑤『恐れ多くも』汝があるじ」とお仕えすべき」神さまを試みるがごときまねをしてはならぬ」と、な。」

⑥試すのにも万策尽きたるこの悪霊は、よき折りが巡り来るのを待たんとて、イエシューさまから離れ去つてござる。

一八・ガリラヤで教え始める

参照 マタイ 4 12-17、マルコ 1 14-15

⑦神さまの御息をその身に受けて、活き活きと力に満ち溢れ、イエシューさまはガリラヤに帰つて来なさつた。かくしてその評判は辺り一帯に広まつてござる。⑧そうして、イエシューさまはそちこちの寄合で教え始め、人みなからこれは大したお人だと思われるようになって行つたのでござる。

一九・ナザレでは爪弾き

参照 マタイ 13 53-58、マルコ 6 1-6

⑨そうして、イエシューさまは、お育ちなされた故郷のナザレに帰つて来なさつた。休み日になり、常のごとく、イエシューさまは寄合に入つて行つて、尊き書き物を読もうと、立ち上がつてござる。⑩そして渡されたる御言持ちイザヤさまの巻物を開き、こう書いてある所を探し出してござる。

①「¹⁸頼りもない、望みもない、心細い人たちへの神さまからのよい便りを語って聞かせると、

神さまはわたしを選んで、

尊い油をお塗りなさった。

だから、このわたしには、

神さまの御息がかかっている。

わたしの役目は、

敵に捕らわれた人々を放し、

盲いの目を開き、

虐げられている人々を助け出し、

大手を振って行かせることだ。

¹⁹こうしてわたしは

御あるじなる神さまの

恵みの年の来たのを告げる。」

²⁰イエシューさまはその巻物を巻いて、下役の人

に渡し、「そのまます」席にお着きなされた。

休み日に行なわれる正式の礼拝では尊き書

き物の中から七つの箇所がそれぞれ七人の

読み手によつて読まれ、最後に読まれるの

が御言語りの書でござる。これを読むは身

の誉れとされ、読み手は定めの箇所を読ん

だ後に、それについて思うところを述べる

仕来たりでござつたが、イエシューさまはこ

の日それをなさらず、正面の読み手の立ち

台から降りて、さつさと自分の席に戻りな

さつたので、人々はこれを訝り、

寄合にいた人みなが一斉にイエシューさまに目を向

けてござる。

²¹するとイエシューさまは、「やおら、その場に

立ち上がり、幼なじみの人々」皆に向かい、

懐かしき故里の言葉にて

このように語り始めなされた。

「この書き物に書いてある事は、今日お前さん達かみきき耳で聞いた通りに、現実の事になったのだ（なったのだ。）」[㊦]

22 人は皆口々にイエシユーさまを誉めて、イエシユーさまの口から出て来る、心も躍るようなその言葉に舌を巻いて、「誇らしげに」繰り返しこつ言つていたものでござる。

「これアあのヨセフ「大工」の倅でアねアか？」[㊦]
23 そこで、イエシユーさまはこの人たちに向かつて、言いなされた。

「お前さん達が俺にこつ言うんだべな（言うのだからな。）『諺にも《医者よ、おのれを治療しろ》どある。カファルナウムでアさまさまな「すばらしい事を」やつたづうが（やつたそうだが）、此処はお前の故郷だべア（だろう？） 此処でも何がそれど同じ「すばらしい事を」やつて見せろ」つて。」[㊦]

24 そつして、こつ言いなされた。
「お前さん達にシツカド俺は語つておく。御言持

ちアその故郷でアまるつきり形無しなものだ。

25 全くの話、①エリヤ様がこの世に在りやつた頃に、三年と六月日照りア続いて、国中に大きな飢饉があつたつたが（あつたものだった）、あの時イスラエルにア寡婦がどつきりいだつた（いたものだ）。

26 しかし、神さまアエリヤ様をお遣わしなされたの、ア、この寡婦等の所でアなくて、他でもねア、

「夷狄の町」シドンのサレプタの寡婦の所へだつた。② 御言持ちのエリヤ様の頃に、イスラエルにア腐れ病の者が大勢あつたつたども（あつたのに、

治して貰つたの、ア、「夷狄の国」シリアの人ナアマンだけで、その他にア誰もいながった。」[㊦]

28 寄合にいた人たちはこれを聞いてカンカンに腹を立ててござる。

自分たちの村から立派な御言持ちが出たとガリラヤ中に評判の高い幼なじみが帰つてきたことで、みんな大喜びで、この誉れの役を与え、話を聞こうと胸を躍らせていた

のでござる。ところがエリヤ、エリシャとい
うあの偉大な御言持ちの故事を引つ張り出
して、イスラエルは穢らわしい夷狄以下だ
と言いだしたので、村人が腹を立てたのは
当然でござった。

29 一同の者は突つ立ち上がつて、イエシューさま
を村から追い出し、そもナザレなる村は山の上なれ
ば、その山の崖縁にイエシューさまをば引つ張り
行き、そこから突き落とさんとしたのでござった。

30
されど、

そこはやはり幼なじみの友同士。息子むすこの身
を案じて髪振り乱し、金切り声の母マリア
ムの必死の嘆願もあつたでござろうが、親
しき故の激情も、いざとなると萎えたので
ござろう。

イエシューさまはその者らの真中を擦り抜けて、

去つて行きなされた。

その後イエシューさまが再び故里に足を踏
み入れることはござらなんだ。

二〇・穢らわしい憑き物を落とす

参照 マルコ 1 21、28

己が真意をわかつてくれるものとはばかり思
いこんでいた故里の仲間に、思いも寄らず
嫌われて、傷心の

31 イエシューさまは「氣を取り直し、」その後、ガ
リラヤのカファルナウムの町に下がつて行きなされ
た。休み日ともなれば「寄合に出かけてゆき、」町
の人たちにさまさま教えていなされたが、³² イエ
シューさまの言葉には、誰も刃向かえないようなの
びのびとした力と勢いがあつたから、皆はその教え
に舌を巻いて感服していたものでござった。

次に、イエス様の「故郷」でのご様子をご紹介しましょう。

イエス様がガリラヤのナザレに來た時のことです。ナザレは、イエス様が青春時代を過ごした場所です。イエス様はナザレの公民館に入りました。それは「休み」と定められた土曜日でした。この時代のこの地方の一般的な慣習に従って、「休み」と定められた毎週土曜日に、人々は公民館に集まり、旧約聖書の朗読を聞き、大人の学習会をして情報を共有し、植民地主義を進める古代ローマ帝国に對抗していたのでした。故郷の仲間が取り仕切っている公民館にいたイエス様に、その当時の習慣に従って、その集会の中で旧約聖書の巻物が手渡されました。「お前、読めよ」とい

う感じです。立ち上がり、巻物を開いてみると、それは「イザヤの預言」でした。その日読む場所はあらかじめ定められていたのですが、イエス様はその目に留まった一つの詩を、自分なりに組みかえて、このように朗唱し始めました。

神様の息が 私に臨んだ。

そうして私は 香油を塗られた

そのように

不思議な空気に包まれた。

それはひとえに 良い知らせを 語るため。

貧者に届く 良い知らせ。

神が私を遣わした。

捕らわれ人に

解放の時が来たぞと告げ知らせ

盲人に 視力が戻ることを告げ

押し潰（つぶ）されて

ぺしゃんこになった あの人たちを

解き放ち 自由の身にして

この世に送り出すために。

そうして まさに この年が

神の嘉（よみ）する 日々となる。

そうしてイエス様は巻物を巻き取り、係の人にそれを渡しました。集会に集まった人々は、続く言葉を待ちましたが、イエス様はそのまま席に座ってしまいました。それで、公民館にいるすべての人の目が、イエス様に釘付けになったようになりました。それで、イエス様はこうお話しになりました。「今日、この言葉は、本当になった。皆さんの耳に届いたこの時、この言葉は現実になった。」

それで、公民館の人々は、ざわざわと話し始めました。イエス様の青春時代を知っている人々が「昔のあいつは、ああだった・こうだった」と話し始めました。イエス様の口から出てきたこの恵みの言葉に、一同、驚いて

しまったのです。「なんだ、こいつは、あのヨセフの息子だろ」という声が大きく聞こえた時——ここで読者の皆さんは、悪魔の挑戦の前に、イエス様の系図を確認したことを、どうぞ、思い出してください——イエス様は語り出しました。

「きつとみなさんは、『医者よ、自分を治療してみろ！』という格言を思い出し、私に言ってみたく思っているのでしょう。『マルコが伝えた良い知らせ』に書かれているようなこと、カファルナウムでのすごいことを、きくと聞いている皆さんです。それを故郷でもやってみると、そうおっしゃいたいのでしょう。」

そしてイエス様は次のように語ったのです。

「アメージン！あなたたちに、私は言います。

まさに今読んだような、旧約聖書の預言者と
呼ばれる英雄たちは、自分の故郷では歓迎さ
れないものです。いいですか、本当のことを
言いましょう。旧約聖書の預言者として名高
いエリヤのことを、思い出さない。3年半も
の間、天の窓が閉じてしまって、まったく雨
が降らなくなった時のことです。この地に深
刻な干ばつが訪れ、大飢饉となりました。預
言者エリヤは、その時、一人の寡婦（かふ）
のところへ遣わされ、栄養失調で死んだはず
の子どものいのちを取り戻しました。しかし
その奇跡は、ギリシア人の町・シドンのサレ
プタで起こったのです。この土地の誰も、そ
のような奇跡に与（あずか）ることがありま

せんでした。エリヤの後継者・預言者エリシャの場合はどうだったでしょうか。エリシャは『らい』と呼ばれた身体が溶ける伝染病を癒す奇跡を起こしました。その病氣にかかった人は、この土地にもたくさんいましたのに、エリシャが癒したのは、隣国で敵国のシリアの將軍ナアマンだけでした。」

アブラハム、そしてアダム、そして神さまへとつながる「我々の仲間」の一人・ヨセフの息子——そうしたつながりの中に閉じ込められることなく、そのつながりを乗り越えて、「すべての人」が救われる。「すべての人」が、「あらしむるもの」聖書の神「主」の素晴らしいことを知る。自分がここにいることの素晴らしさを知る。世界がこのようにあること

の神秘を驚き、喜ぶ。そのようなことは「我々だけの特権だ」と思っているイエス様の故郷の人々にとって、イエス様の「良い知らせ」は、腹立たしいものでしかありませんでした。その腹立たしさを引き起こす言葉が、旧約聖書の預言書から語られ、腹立たしく思う人々の耳に届いた。そして、今、イエス様への怒りが渦を巻いて湧き上がってきました。

人々は立ち上がり、イエス様を取り囲み、公民館の外へと連れ出しました。ナザレの高い丘の上から、イエス様を突き落としてやろうと、殺意が漲（みなぎ）っていました。しかし、イエス様はその怒りの渦の中から抜け出し、さっさと故郷を後にして、出て行ってしまうしました。

これが、イエス様の故郷での一コマです。

それは、イエス様の働きの全てを凝縮した出来事でした。イエス様は、何をなさらないのか。それは、悪魔との対決の中で、明らかです。そして、イエス様は何をなさるのか。それは、故郷の人々との対決の中で、明らかになったのでした。

ナザレのイエス

(ルカ福音書四章一六—三〇節)

私たちは小さな礼拝堂に集まって、イエスがどのようにしてユダヤ教会に行かれ、そこでイザヤの預言書を朗読されたかが叙述されている福音書の部分を読んだ。

「主の霊は私とともにある。なぜなら貧しい人々に喜びの知らせを告げるために、主は私に油をそいで下さったからである。主は私を、とられの人々に解放を、盲目の人に見えるようになることを、希望を奪われている人々に、自由で重荷が取りのぞかれるだろうということを説教させ、主の恩寵の年を宣言するために、私をおつかわしになった」。

誰かが言った。——ここで俺たちに解することは、イエスは聖書ではなく、ユダヤ教会でその聖書を間違つて解釈していたパリサイ人に反対していったことだ。パリサイ人たちは、自分たちの利益を守るために、聖書の使命が万人の解放であつたにもかかわらず、聖書を利用していたんだね。

私は説明した。——ギリシア語の福音という意味は、「喜ばしき使節」であり、今日、私たちが読ん

でいる翻訳は、「貧しい人々に嬉しい知らせを告げ知らせる」という意味で、私たちがそれより以前に用いていた「貧しい人々に福音を伝道する」という記載よりもよいだろう。「喜ばしき使節」という言葉は、イエスの時代には、よき知らせの意味を持ち、或る喜び、ひとつの勝利を告げる使者のことだった。王が生まれたとき、戦争に勝利したとき、あるいは皇帝が或る町を訪れることを望んだときに、「喜ばしき使節」あるいは福音が告げ知らされた。或る使者、あるいは福音者が「喜ばしき知らせ」をもたらし時には、大層な祭りが行われたんだね。そこで皇帝はしばしば、偽の「喜ばしき使節」を送った。これは民衆の負担によって、彼の栄誉のために大がかりな祭りを催させるためだった。事実上はこれらすべての「喜ばしき知らせ」は、大抵は民衆にとって新しい圧迫の知らせを意味する偽の喜びだったんだ。ヘロデが権力の座に就いたとき、ガリラヤ地方の町々もこのような「喜ばしき使節団」あるいは福音者たちを迎えた。イエスの時代には、この言葉は政治的な表現だったんだ。とくに皇帝崇拜に関連して用いられていた。イエスはこの表現を用いることによって、すでに、彼の使者は新しい国の知らせになるだろうということを暗示している。

さてすぐに幾人かの人たちが話し始めていた。

——そしてイエスの喜ばしき知らせは、貧しい者たちに宛てられていたんだ。なぜなら、この新しい国は貧しい者、謙遜なる者たちの勝利なんだから。

——先刻の他の嘘っぱちの知らせと違って、それは本当に喜ばしい知らせだった。

——それは全民衆に対するよい知らせで、祭りを祝う労苦も報われたことだろう。

——それは人が信じるか、あるいは信じないかという情報だったんだな。

女性たちのうちのひとりが言った。——イエスさまがその時、預言者たちの書物で読んだことは、解放の預言だったのね。そしてそれは、多くのキリスト教信者が今もって理解していない私たちのための教えでもあったんですね。なぜなら、或る人は教会にも行けるし、日夜、ランランランなんて歌うこともできるわ。まだ、どれ程の人間が捕われているか、どんなに多くの不正が私たちを取り囲んでいるか、どれ程の悲しみ、どれだけの虐待がこの国で行われているか、どれほど多くの女が毎日、眼を泣きはらしているかを考えたとしてもね。そして、たとえまた誰かが捕えられて連れ去られたとしても、一体、私たちが何を悲しむというの！「彼は何か悪いことをしたんでしょ」って、私たちは言うわ。それでおしまいよ。

フェリペがこれに附け加えた。——いろんな意味で捕えられた人間がいる。ただ刑務所に入れられてる人間だけが囚人ではない。たとえば、金持に雇われている男だって、金持の囚人であり得る。つまり、彼のために働くことを強制されるという点でね。そのメンタリティーから、ほんの僅かな自由をも考えないような人たちも居るよ。彼らの精神が、ただただ従順な臣下でしかありえないような人間たちのことだ。

反対側の海岸からやって来た男。——そういう人間たちは、自分たちに加えられることのすべてを我慢しているんだ。なぜかって？もし俺たちが金持の地主のところでは働いていたら、その金持が俺たちにすることのすべてを、俺たちは誰にもしやべらないだろう。もし彼奴らが、ちょっとした間でも

自分のことにかまけて、働かなかったなどということ、誰をも解雇したりしなかったらな。「私はきみを解雇しなくてはならないと思う」と彼奴らは言うだろう。だから職を失わないために、皆、日曜日まで我慢しているんだ。

他の男。——しかし一度、口を開こうとすると、話はすぐに共産主義「コミニズム」ということになるな。ラジオで彼らは始終、言っているじゃないか。それはすべて共産主義だって。それじゃあ、奴隷制だけが、いいってことになる。

私は説明した。——イザヤが言っている《恩寵の年》と《聖なる年》と名づけられているものも、ヤーウエが七年ごとにイスラエルの民のために命じた、すべての人間、すべての物の全面的な解放の年のことなんだ。この年には、買われた奴隷にも自由が戻され、すべての借財も帳消しになり、そして売られたすべての土地も元の所有者に戻されるんだ。この措置の意図は、平等と自由を保持するためであり、土地所有の偏向を防ぐためだった。後になるとこの法律は《恩寵の年》を（《ヨベルの年》として）五十年ごとに祝うように定めているんだが、この法律は時とともに守られることは少なくなっていく。イザヤの預言は、最終的な主の恩寵の年に、救世主「メシア」が前兆を示されるだろうということを意味している。

ウィリアム 聖なる年、あるいはヨベルの年というのは、今日では、教会で祈り、法王の祝福を受けるために、ローマに巡礼することになっている。それにしても、聖なる年というのは本来、農地改革とすべての生産手段の社会化でなければならなかったはずだ！

他の男。——キューパでは聖なる年が祝われたんだ。

イエスはその書物を閉じて、従者にお返しになり、お坐りになった。堂内のすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは話し始められた。「きょう、この書の言葉は、あなたがたの耳の前で実現された」。

ペドロ・ラファエル・グチエレス それは明らかなことだ。単なる解放の告知によって、イエスはすでにこの預言を実現していた。イエスはただ「きょう、この言葉は実現された」と言うだけで、彼は解放を声明したんだ。

ウィリアム 預言の書物は、救世主^{メッセア}がこのことを告知すると言っている。イエスはこの書物を実現するために、ただ、この書を読んだだけだった。貧しい人々への喜ばしき知らせは、この時を限りに布告されたんだ。

ペドロ・ラファエル イエスは彼の言葉によってよりも、その後の彼の行為によって、彼が救世主であり、予告されていた解放であることを示したんだ。これがイエスの最初の政治的な宣^{マニフェスト}言だった。オリヴィア 私たちはイエスご自身の口から、この預言はイエスのことを言っているのだということを知っている。このようにしてこの預言は実現される。彼がこのユダヤ教会のなかで読んだ預言に

限らず、聖書の他のすべての預言も実現されたんでしよう。だから、それらの預言書は、今でも私たちにとって興味深いもののね。

ナタリーエ　今でも、私たちはこの言葉に従わなければいけないわね。恐らく皆がこの預言を信じているというわけではないけど。

テレシータ　これらの言葉は、自由への招待状況みたいなものなんですわね。

ウィリアム　そうだね。イエスは、自分が預言者が語った男だと言ったわけだ。預言のすべての言葉は解放を目ざしているんだ。つまり、貧しく、苦悩を負っている人々、盲目の人々、捕われている人たち……

ラウレアノ　盲^{めくら}いた人たち、投獄されている者たち、絶望にうちひしがれている人たち、これらすべては皆、同様に貧しい人間たちなんだ。

ペドロ・ラファエル　対照として、私たちはまた、否定的な局面も見なければならんじゃないのかな。金持の人々にイエスはなんの知らせも運んではこず、貧しい人々のために来た。彼は幸福な人々を助けるのではなく、問題を抱えている人々を助けるためにやって来たんだ。人々を投獄する人々と連携するためではなく、投獄されている人々を解放するために来た。人々の目を塞ぐためではなく、物が見えるようにさせるために来たんだ。人々を迫害するためではなく、すべての迫害を取り除き、最終的な解放を告げ知らせるために、イエスは来たんだ。よくやられていることだけど、みなさんはこの言葉を間違って解釈してはいけない。イエスがこの言葉を語った教会においてさえ、間違

って解釈されることがある。

コスメ さつきマルセリーノが言ったこと、この世は、キリストがそう望まれたものとは正反對のものになっているってことだけれど、俺には、今、改めてそれがはっきり解ったよ。

私 キリストの言葉がよく誤解されているという例だが、「彼は貧しい人々に喜ばしき知らせをもたらすために来た」という言葉の代わりに、「彼は貧しい人たちに福音を説くためにやってきた」といつも訳されているんだね。この翻訳だと、人々はつまり、ちょっと違ったふうに理解してしまうんだ。

人々はみな、その口から出た恩寵の御言葉に感嘆し、「彼はヨセフの子ではないか！」と言いつつた。

フェリペが笑いながら言った。——あれはオクタヴィオの倅せがれじゃないかって言うみたいだね。あるいはまた、どこかの百姓か労働者の……或る他の男がここに居ればだね、……

——それもまったく理屈に叶っててるでさあ——と文盲のトマス老人が附け加えた。——ここらじゅうの人間だって申しますだ。——ありやあ、トマス爺さんとこの息子じゃねえかって。僕らのこの集会に出ようとしねえ者は、そんなたちと同じように学問のねえ百姓たちが、福音書を解釈しようとしたって、決してなにも新しいこたあ学ぶことあできねえって思っていますだよ。「そうさな、学問のある連中だったらな」とか、「だがよ、俺がマルセリーノやアレファンドロやラウレアーノみたいな

奴らの言うことに、耳を傾けなくちゃあなんねえとはよ」と言ってますだよ……

私は言った。——この人々もイエスに関して、それと同じようなことを言ったんだね。喜ばしき知らせというのは、貧しい人々のために定められたんだ。そして、それを最もよく理解でき、それに関して最もよく話をすることができるのは、貧しい人間たちであって、神学者たちではないんだよ。私たちはそのような同胞に、解放は貧しい人々からのみやって来ることが可能だってことを明らかにしなければならぬ。イエスは或るとき、御父に、このことが教養ある人々の目から隠されていて、貧しい謙遜な人々にのみ開かれていることを感謝なさっているんだ。

そこでイエスは彼らに言われた。「もちろん、あなたたちは私に言うだろう。『医者よ、自分自身をなおせ』と」。

レベীカ イエスさまが貧しかったからね。イエスさまは、他の人々を解放する前に、むしろ自身を解放すべきだと言うのね。この人たちは、イエスさまが貧しい人々を解放するためには貧しくなければならなかった、金持なんかであっちゃあならなかったことが、解つちゃあいないのね。フェリオ だけど、これと同じようなことを今だって、ここだって、僕たちに言う奴らがいるんだぜ……

イエスが附け加えられた。「まことに私はあなたたちに言う。自分のふるさとで重んじられた預言者はいない」。

トマース そりゃあ、はつきりしている。そんなもんだ。

ペドロ ナザレにおいてもまたそれが確認されたわけだ。つまり、人々はイエスを追い払い、彼を殺そうとした。

マルセリーノ イエスは今だって、当時のユダヤ教会でしたのと同じように、この喜ばしき知らせを告げ知らせ続けているんだ。そして彼はその口を通して、ソレンチナーメのこの貧しい村にも告知している。俺たちがたった今読んだこの文章は、当時のあの場所におけるのとまったく同じように実現されたんだ。